

新・切手の日誌

# Stamp Diary



---

2011年8月号

8月1日（はじめに）

---

暑さにめげず、溜まったフレンチ・スタンプをガッツリ整えるべし！と決めた。正直、フレンチ・スタンプの興味はなかったのであるが、交換相手としてフランス人からの申出が多く、気がついたらアルバム2冊分以上まで溜まっていた…。200枚弱くらい処分（捨てるのではないよ！）もしているのだが。

大好きな1960年代。もはや戦後から立ち直りつつある、この時代が好きだ。アメリカや日本の60年代は意匠を凝らしていて、結構興味深いぞとソワソワしているが、フランスの場合は濃い。まるで、フランス料理のように濃い。ジューシーな肉類にバターとクリームたっぷり、それでもって赤ワインでぐびっという案配に、どの切手もけして手抜きはしていないが、デザインも作りも濃い（くどい？）。本当にこれらが日常生活の郵便物で使用されていたのだろうか？と考えさせられる。

1954



1951



1955



1957



1958



1960







以前、ある雑誌で「文化の指標として料理と映画と自動車が考えられる。この3点を満たしているのはフランスとイタリアと日本」という指摘を読んだことがあり、個人的にはこの解釈、かなり気に入っている。 生憎、イタリア切手はまだ接していない。文化の指標としてはまあこの3

点（料理、映画、自動車）で十分かもしれないが、切手で量るのも面白い。

フランス切手のとりかかりとして、60年代は濃いのに同時に面白みが乏しい。どれも隙も遊びもなく正当派でつまみどころがない。一方、絶対こういうのがとてつもなく好きな人々も存在すると思う。私も否定するのではなく、自分とはじっくりこない。妄想が発展しない。





この調子で、70年代～2000年まで続く。



夏の暑い時でも、ノーメイクでは外出しない、かならずストッキングは履くという女性も少なくないと思う。特に日本人は。まるでそういう、常にきちんとしている、それが今のところの私のフレンチ・スタンプ60年代の印象である。

ついネガティブな口調になってしまったが、訳もなく素敵な切手も当然ある。むろん、隙もなく突っ込みもできないが、凜としたエレガンスな感じ、そういうのを引き続き、紹介しよう。

それにしても、フレンチは「足すことの美学」を実感させるお国柄である。

## 8月6日（札幌オリンピック）

---

前にも紹介したことあるが、また紹介してしまおう。それほど、このいい加減さが気に入っている。



1972年の札幌オリンピックにちなんだ切手のようであるが、新幹線（右）と富士山？（左）とお城（その左）の意味するものが理解できない。どうしてオリンピックとこれらが結び付くのか？

オリンピックより、むしろ日本ということを強調したいのか？

当時のフランス人が抱く一般的な日本イメージを疑う。フランス人＝フランスパン（固いパン）みたいなレベルだろうか。

8月12日 (ジャポン)

---

当初手に入れた時は気づかなかった。  
日本をフューチャーしている切手だとは。



たまたまフランス切手のサイトを流していると「Japon」という言葉と「うん？この切手（自分のアルバムで）見たことある」と探したところ、発見できた。右下にある「1997 ANNÉE DU JAPON」は「フランスにおける日本年」、今まで全く気づかなかった。

後ろの建物はパリ日本文化会館と思われ、wikipediaによると1997年に会館だから、まあこの辺りの事情を汲み取った切手に違いない。何故観音様かは不明であるが、フランス人が抱く日本のイメージは、先日の札幌オリンピックの新幹線&富士山から、このように変化したようだ。

8月14日（微妙な色彩）

フランス人の交換パートナーが少なくないので、ダブルやトリプルなることある。

その中でもこれ、一卵性三生児。画像のせいで見難いが、かなり配色のバランス異なる。一番右の出来がよいか。上の国名の色も単色クリアだし、雲もわりとはっきりしている。



出来悪いのは、真ん中か。発色がどことなく中途半端な気もする。親が一番出来悪いのが気になるんだよね。って、親にもなっていない私が言うことではないね。

## 8月21日（ユセルとダンケルク）

色と良い、USSELという飾り文字の雰囲気と良い、まさに自分好みの図案なのであるが、それ以上は何もない... 切手である。好きなんだからしょうがない。調べてみたが、なぜUSSEL（地名）という場所なのか全く手がかりはない。



とにかく、こんな調子の切手が少なくない。石造りの建物と地名、もしくは景色など、それはフランス各地に有名無名の建物は多々あろうが、どうしてこうまで切手にするのか。でも気に入ったので、試しにフォト用紙に印刷してみたが、画像は粗いし切手現物や画面で見るほど魅力乏しい。もう少しプリントについて研究してみようか。とにかく、気に入れば、それでよい。

これは左下にある「DUNKERQUE（ダンケルク）」という地名に捕まった。切手そのものは、かの地で開催されたフィラテリスト（切手愛好家）の集まりフィラ会議を記念したものらしい。が、私の妄想は異なる方向へ向かった。



ドイツ語のdank(thank you)「ダンケ」とフランス語のbeaucoup(very much)「ボクー」を組合せたような響き「ダンケルク」に当初はドイツを感じたが、実際の場所はフランスとベルギー国境の海岸沿いの場所であった。

そもそもこの地名はイギリスの小説を読んでいて知った。戦時下のイギリス人にとってのダンケルクは、アメリカ人の「パール・ハーバー」と思いは似ているようで、ドイツの攻撃から（しっぽを巻いて）34万人もの軍人がイギリスへ脱出を試みた場所らしい。Wikipediaには「ダンケルクの戦い」と解説があるが、脱出なので戦いではないという屁理屈を言う余地もあるかもしれない。当事者たちにしてみれば、犬死にを逃れ次の戦いに備えるのも立派な戦術だろうし、この脱出のためには英空軍は空で独軍と戦っていたのだからやはり戦いであろうか。

今となっては、単なるフランスの漁港に違いない。それでも、独軍vs英米仏連合軍とは質的なバランスが極端過ぎるが、それに立ち向かう独軍はやはり優秀なのか。引き続き、ダンケルクのその後が気になって、行き着くところとして「ノルマンディー上陸」作戦にたどり着いた。日々頭を使ってないので、戦略の一つ一つの背景やら意味合いを推測すると、脳がかなり疲労感を味わっている。

ダンケルク、今、この平和な状況でかの地の海を眺め34万人が脱出するワラワラぶりを想像できるだろうか。そんなこんなで、にわか歴女となって日々のお昼にお弁当食べながらダンケルクの撤退とノルマンディー上陸ネタをネットで物色している。

8月25日（変わり種）

今日、道路でBOOK OFFのトラックが走り抜けるのを見て、この切手を思い出してしまった。



私が意図するBOOK OFFのトラックを見たことなければ、この話は通じないであろうが、言いたいことは、トラックの両側面全部が漫画のコマ割りのように隙間なく区切られ、各コマにBOOK OFFカラーの黄色主体で広告が書かれているだけである。そのコマ割りと色使いと妙な情報量の多さが、私にこの切手を思い起こさせた。

ところで、この切手、当初はE. Roosevelt (エレノア・ルーズベルト、ルーズベルト大統領夫人) が映っている左側しか持っていなかったが、先日フランスのイザベラからもらった切手に右側が入っていた。揃って何気に嬉しい。

1998年発行の世界人権宣言50周年記念という感じだろうか。wikipediaでにわかに仕込んだ知識によると、エレノア・ルーズベルトという元ファースト・レディは、この人権宣言の起草メンバーの中心人物でもあったようだ。

さて、このエレノアさんだが、随分むかし第二次世界大戦時にチャーチルやスターリンと三者会議の一人であったルーズベルト大統領の奥さんと知ったとき、随分地味な女性（ひと）だと逆な意味で印象深く記憶に残ってしまった。何しろ年をとっても、若くても（おかめ顔ではないが）このお顔である。この写真はましな方だと思うが、とにかくキッズであればフリルが、レディであればドレスが似合わない系..... だと思った。

ファースト・レディとはジャクリーヌみたいに「華がある」とか、ルーズベルト自身も結構いい男っぽいので、逆玉とか政略結婚とか要らぬ妄想を膨らませた。男性（ひと）は女性の顔と結婚する訳ではない。かつて、K首相(2011/8/25現在)の奥さんの顔を初めて拝見したときにも、「迫力はあるけど華の乏しいお顔」と思ったものだ。

wikipediaを読むと、夫婦ともにルーズベルト一族同士のお金持ち結婚だから、やはり政略に近いものはあったのだろう。実際「自分の秘書ルーシー・マーサ・ラザフォードと夫との不倫を知った（そしてそれを容認した）」という記述もあるから、本音と建前の世界は存在していた。

しかし、今回発見だったのは、このエレノアの父親は「ハンサムだがアルコール中毒」で母親は「美人であったが冷酷」という記述である。美男美女から、なぜこのような地味な女の子が誕生してしまったのだろうか。「金銭的には恵まれていたけど、理想からはほど遠い家庭環境」というのが、セレブの彼女から華を摘み取ってしまったか!!

それでも、夫ルーズベルト大統領亡き後、世から忘れ去られることもなく、逆に何かと世の表に引っぱり出される。「ノンフィクションの伝記を書いても有り余るほどの事績と逸話に豊富」とあるから、世間は彼女を忘れないほど、何か魅力なり（毒なり？）あったのだろうか。性悪説的に思うと、きっとかなり黒々としたお付き合いもあったのではないかと推測する。

そろえでも、50年後に他国フランスの大型切手にも登場する。見た目の華では補えない、存在そのものに華があったに違いない。確かにどの写真のお顔も、美人という趣はないが、すてきなスーツとのバランスが悪いときもあるが、育ちは良いせいか気品がある。それに若いころ、老齢してみえるお顔は歳を重ねてから美人に見えるかも。

さてこの切手、テーマと絵柄の関連性は興味ないが、大型フレンチスタンプのなかでは珍しい感じなので変わり種として私の「お気に入り」入り。最後に一言。ネックレスは間違いなく高価なゴールド製だと睨んでいる。



## 8月31日（フレンチ・ウィンド）

---

8月下旬、気になっていた企画展を2つ観た。

森美術館「フレンチ・ウィンド展」

損保ジャパン美術館「GLOBAL NEW ART」

後者は個人コレクターのコンテポラリーアートコレクションである。よく言われるように、現代アートってよくわからない...けど、そのわからないのを自分なりに意味付けする楽しさに気づくと結構楽しい。それでも、美術館で展示されたりお金持ちのコレクターにお買い上げされれば、もはや立派なアーティストである。本当はまだギャラリーデビュー初々しいフレッシュなコンテポラリーアーティストを探してみたい。

一方、前者はパンフレットの言葉を借りると「世界が注目するフランス現代アートシーンを一同に紹介」であるが、その最初の一歩はマルセル・デュシャンの作品「泉（男性の立ちション用便器）」。この特別展には、レディメイドという既製品を芸術作品と見なすパラドックスを引き起こさせるコンセプトが背景にあるようだ。で、このマルセル・デュシャン氏はその火付け役なのである。

そんな理屈を述べるのであれば、切手も立派なレディメイドということで、今月の即席現代アートの一作品はこれ！

タイトルは"切手のような絵画"



フランスの絵画をモチーフにした大型切手は、使用するより鑑賞する方が適していそう。印象派を初めとして世界的に有名な絵は沢山あるしね。

それにしても、東京はいろんな展示があるから本当に有り難い。いつもは混雑した通勤地下鉄とか家賃が高いとか、人が多くて嫌になるが、こういうとき東京の有り難みを思う。

思いも寄らなかった相手から言い寄られるように集まってくるフレンチ・スタンプである。私の関心はどちらかといえばドイツを中心としたドイツ語圏（スイスとかオーストリアとか）にあるが、なかなか相思相愛にならず集まってこない。

しかも、フレンチ・スタンプ提供者の多くは「フランスの切手は人気がある」という思いが透けて見えるが、その逆、私も「日本の切手は外国で人気がある」と思っているから互いにうぬぼれが強い。

過去の実体験(?)から、相思相愛にならなくても、自分の意識を変えれば思いも寄らない相手でも、やがて気になってくるのだから、このさい、もう処分などせずとことんフレンチ・スタンプとつき合ってみよと思っている。

来月はオーストラリアを予定しているが、ネタが続くかかなり不安。